

事後評価報告書
(日本-ドイツ研究交流)

1. 研究課題名: 「非定常環境におけるロバスト適応 BCI」

2. 研究代表者名:

日本側: 京都大学 情報学研究科 講師 大羽 成征

相手側: Technical University of Berlin, Computer Science Faculty Machine Learning Department,
Professor Klaus-Robert Müller

3. 総合評価: A

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

6つのワークパッケージのどれもが、日本とドイツが連携して研究や合同ミーティングを重ねたことにより、目標の研究成果を得ることができたこと、および、ロバストな情報抽出の方法を提案し論文として掲載されたことは、BCI を実用化へ一歩近づけた点において評価できる。

一方、個々の成果が BCI のシステム構築をどの程度前進させたのか、全体のデザインとその達成評価が不足しているように思われる。

(2) 交流活動の評価について

何回かの共同シンポジウムを通じて、プロジェクト関係者以外の研究者との交流が広がり、日独の共著論文(Morioka *et al.*, 2015)を基に、事業終了後の他の競争的資金を獲得し、Berlin Big Data Center との共同研究が継続できるようになったことは評価できる。しかし、終了報告書からは、著名な研究者との交流が強調される一方で、日独の事業関係者同士の交流活動に関する記述が見当たらないように思われる。また、共同シンポジウムの開催が未開催であったことから、今後はシンポジウム開催をより積極的に行い、社会への波及効果促進についても考慮すべきである。

(3) その他

本研究が目指す非定常での BCI の有益な具体化のために、プロトタイプを作成し、その実現にむけたより絞り込んだ技術開発を検討いただきたい。